

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月15日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530786

研究課題名（和文） 学習指導法の創造による教師の力量形成
—1930～50年代日本における展開研究課題名（英文） The development of teaching profession through lesson study
—the case in Japan from 1930's to 1950's

研究代表者 吉村 敏之（YOSHIMURA TOSHIYUKI）

宮城教育大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80261642

研究成果の概要（和文）：1930年代日本の教師たちが、学級の実実に根ざして学習指導法を創る研究を進めた。瀬川頼太郎が編集した雑誌『教育論叢』によって、全国各地の教師が担任する子どもの事実を観察、記録して問題を発見し、解決にむけて方策を追求する研究が促された。教室の子どもの学習の質を高める研究は、戦時下でも持続され、1950年代の学校における授業研究へとつながった。教育政策の転換、教育界の流行、社会変動に左右されず、教師が教室の実践に専念して子どもの可能性を高める授業を追求することによって、教職の専門性が確立し、教職の社会的意義が示される。斎藤喜博を中心とした、群馬県玉村小学校と島小学校での実践は、教師が日々の授業を創ることで成長した事例である。教育が政治を超える例でもある。

研究成果の概要（英文）：In 1930's Japanese teachers continued educational research on the basis of their classroom facts. Educational magazine "Kyoiku Ronso" supported this movement. Despite wartime(World War II), the research into learning and guidance lasted. The accumulation of teacher's practice produced the lesson study in 1950's. Teaching profession develops through lesson study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：授業研究、現職教育、学力向上、学習形態、雑誌『教育論叢』、瀬川頼太郎、斎藤喜博、群馬県玉村小学校

1. 研究開始当初の背景

本研究は、(1)教育方法史上の新たな知見、
(2)今日の教師教育に対する示唆の2点から、

以下のような学術的意義があると考えます。

(1)1930年代日本の教師による学習指導法研

究の質の高さが1950年代の授業研究につながった。1930年代日本の公立小学校教師によって、高いレベルの学習指導の原理と方法が創られた事実を示す。さらには、戦時下でも教師による学習指導法研究が持続されて、戦後の教育改革期（戦後新教育）につながった事実、そして以後の授業研究に発展した事実を示す。教育実践の質を政策やイデオロギーと結びつけて裁断する、従来の研究（海老原治善『現代日本教育実践史』など）に対して、本研究では、教師による教室での学習指導法の原理と方法の蓄積に注目する。

(2) 学校における日々の学習指導法の創造が教師の力量形成を促す。教室において学習指導法を創造する実践を積み重ねる中で、教師としての実践的指導力を身に付ける事実を示し、これからの教師の現職教育のあり方への示唆を得る。華々しく騒がれた教育改革の試みが「挫折」してゆく中で、着実に成果をあげた例を詳細に検討することで、教師が学習指導力を身につける条件が明らかになる。力量形成の条件は、日常の学習指導に根ざす研究と教師たちの研究集団の充実にある事実が示されるであろう。

2. 研究の目的

1930年代日本の教師による学習指導法研究の蓄積が、1950年代の授業研究へと継承し、発展した事実を、特徴的な事例の検討をふまえて具体的に示す。教師の教育実践の持続と蓄積に注目すると、次々に現れては消える流行の繰り返しという、政策や指導者の主張の動向とは異なり、教師による学校での学習指導法研究の連続性が浮かび上がる。

教育政策史、教育運動史、教育理論史に還元することなく、教師の創る学習指導の原理と方法が持つ固有の価値を示す点と、日々の学習指導法の創造による教師の力量形成の意義を示す点とに、本研究の独自性がある。

アメリカやイギリスなど西洋のシステムをつまみ食いして、政策担当者や教育学者が作った「改革」モデルは、日本の教育風土や教員文化になじまず、混乱を招く。教師を消耗させ、教育の質を低下させる。政策転換や社会変動に左右されることなく、教室で地道に日々の学習指導を積み重ねてきた教師たちの思想と方法に光を当て、日本の教育のレベルの高さを活かす必要がある。

教師による教室での実践→学校集団による研究→地域の教師集団による研究→教師間の全国ネットワーク→教師に拠る理論の創造→教師の成長を促す政策という、流れが求められる。

3. 研究の方法

『教育論叢』掲載の実践記録をもとに、当時の教師による学習指導法研究の特質を示す。特に、教師たちの中で、どのような原理と方法が共有されたかに焦点を当てる。

(1) 1930年代の『教育論叢』誌で展開された教師による学習指導法研究の実態を解明する。奈良女子高等師範学校附属小学校の「学習法」など、「大正新教育」と称された運動との異同に注目する。

(2) 『教育論叢』誌に登場する教師たちの研究ネットワークの実態を明らかにする。

『教育論叢』誌が玉村小学校の学習指導法研究に与えた影響を明らかにする。

玉村小学校の校内研究誌『草原』と『教育論叢』との共通点を示す。

『教育論叢』誌を通して、編集者の瀬川頼太郎、滝野川小学校の本田正信、近隣の高崎中央小学校の岡田刀水士が、斎藤喜博に与えた影響をさぐる。

(3) 1950年代島小学校における「授業の創造」の基盤となる、『教育論叢』誌の学習指導法研究の特質を明らかにする。特に、学習形態、実践記録の様式に注目する。玉村小学

校の学習指導法研究と島小学校の授業研究をつなぐ、戦時下の芝根国民学校の教育、敗戦直後の教師たちの教育研究「西佐波教育会」の活動について、実態を解明する。玉村小学校の学習指導法研究と島小学校の授業研究との、共通点と相違点を明らかにする。

予備学習、独自学習、組織学習といった形態の効果をさぐる。

教師の研究の進め方（日常の研究組織、研究授業会のあり方、授業記録など）の特徴をさぐる。

1950年代の授業研究が1960年代以降どのように展開するかについて、概要を示す。

島小学校の影響を受けた、山梨県巨摩中学校の授業研究の実態を明らかにする。

斎藤喜博、高橋金三郎、林竹二らによる宮城教育大学の教師教育改革への影響を示す。

4. 研究成果

1930～50年代日本において、教師たちが、戦時体制下でも、学習指導法研究を蓄積した事実を示した。教師による教育研究の特質と、研究を支えた条件も解明した。主たる成果は、(1)1930年代の雑誌『教育論叢』で展開された教育研究の質の高さ、(2)教室における学習指導力の向上による教職の専門性の確立、

(3)学級の事実を記録することによる教師の指導力の向上、の3点について、実例を示したことである。

(1)1930年代に、編集者の瀬川頼太郎を中心として、『教育論叢』誌で進められた、日本各地の教師による教育研究が、1950年代の「授業の創造」（群馬県島小学校など）の基盤となった。教科学習の質を高める授業の組織、担任学級における課題の発見と追求、眼前の子どもに対する観察、記録、省察など、自らの実践に根ざした研究を展開した教師集団が全国に存在し、日本の教育の質を高めた。

学級を学習集団として教師が組織する「集団主義教育」、子どものつまずきに応じて文字や計算を習得させる方法の創造、社会で生活する力の養成にむけた教科学習の改善など、学習指導法が研究された。

教師が担任する学級の子どもたちの事実を省察する「生活心理研究」が行なわれた。教師が子どもの様子を観察して記録する「学級

児童観察記録」の作成が進められた。

(2)群馬県玉村小学校では、斎藤喜博を中心に1930年代から1943年まで、学習指導法研究が展開された。研究の推進にあたって、『教育論叢』誌との関連がみられる。斎藤の論稿が掲載されたり、編集者の瀬川が玉村小学校を訪問した。

玉村小学校の教師たちによる研究の成果は、斎藤が転任した芝根国民学校でも活かされた。当時、新任教員であった、関根多嘉子は、斎藤の助言のもと、学習指導法を形成する。（関根氏から、指導した、子どもの絵画を宮城教育大学教育臨床研究センターに寄贈していただいた。宮城教育大学附属図書館内の「教育実践資料室」で展示している。）

さらに、斎藤が1952年～1963年の11年間にわたり校長を務めた島小学校では、授業の創造が進められた。

教師による教育研究は、眼前の子どもの事実に応じて、日々、授業を創り続けることで、確かな成果が得られる。授業の追求の過程を通して、実践の指針となる原理と方法が、教師に形成される。子どもの学ぶ筋道をとらえて、教材に対する追求を深めること。個人での学習を集団での授業へと組織する方法を創ること。さらに、授業の事実を省察し、子どもの可能性を発見すること。学習指導力の向上にむけて、教師が授業研究を続けることによって、教職の専門性が確立される。社会変動や政策転換に左右されず、教師が教室での実践に深く沈潜すること、学校内で同僚間の研究集団を形成すること、地域で互いの授業の質の向上にむけて教師が交流すること。学習指導力を高める教師の研究が、専門性を高めて、教職の社会的意義を示す。

『教育論叢』誌上での学級の実事への検討、玉村小学校での学習形態の創出、島小学校の授業研究は、日本の教師の力量の高さを表している。高い指導力を備えた教師が子どもの学力を向上させる。子どもの学力を高めるには、教師が授業を組織する力量を高めることが不可欠であることがわかる。未だに、教師の指導力が不十分なまま、子どもにのみ、学習時間の増大を求めるなど、努力を強いる傾向がある中、示唆に富む事実である。

教師が教材を深く追求することで、子どもの学力が伸びる事実は、現在も生まれている。三重県桑名市立藤が丘小学校では、伊藤新司校長のもと、教材解釈を深める授業研究が6年間続けられ、子どもの学習の質が高まった（本研究の成果公表として、伊藤氏の報告をもとに教師教育について考える研究会を開催）。

(3)教師が子どもの事実を日々記録すること

によって、授業を創る力が高まる。とりわけ、子どもを見る目が磨かれ、指導力が伸びる。『教育論叢』の「児童観察記録」、玉村小学校刊行の『草原』、島小学校の授業記録など、本研究で収集した資料は、今後、授業研究や教師教育に活用できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 吉村敏之、子どもが見える教師の眼力—斎藤喜博の成長、宮城教育大学紀要、査読無、46 巻、2012 年、241-250 頁
- ② 本間明信、体系と教育 (1) —無意識と教育、宮城教育大学紀要、査読無、46 巻、2012 年、223-229 頁
- ③ 吉村敏之、雑誌『教育論叢』における学習指導法研究—教師による教科学習の改善、宮城教育大学紀要、査読無、45 巻、2011 年、241-248 頁
- ④ 本間明信、斎藤喜博、学習形態の成立をめぐる、宮城教育大学紀要、査読無、45 巻、2011 年、227-239 頁
- ⑤ 本間明信、教材開発の原則、宮城教育大学紀要、査読無、44 巻、2010 年、237-250 頁

[学会発表] (計 5 件)

- ① 吉村敏之、雑誌『教育論叢』における子ども研究—「児童生活の記録」に拠る省察、日本教育方法学会第 47 回大会、2011 年 10 月 2 日、秋田大学
- ② 吉村敏之、雑誌『教育論叢』における国語指導法研究、日本教育方法学会第 46 回大会、2010 年 10 月 9 日、国土館大学
- ③ 吉村敏之、雑誌『教育論叢』における学習指導法研究、日本教育学会第 68 回大会、2009 年 8 月 29 日、東京大学 (駒場)
- ④ 本間明信、斎藤喜博の孤立—玉村小学校と島小学校、日本教育学会第 68 回大会、2009 年 8 月 29 日、東京大学 (駒場)
- ⑤ 吉村敏之、本間明信、「学習形態」再考<ラウンドテーブル企画>、日本教育学会第 68 回大会、2009 年 8 月 29 日、東京大学 (駒場)

[図書] (計 2 件)

- ① 吉村敏之、春風社、斎藤喜博と雑誌『教育論叢』(横須賀薫編『斎藤喜博研究の現在』所収)、2012 年、25-53 頁
- ② 本間明信、春風社、斎藤喜博—学習形態の成立をめぐる (横須賀薫編『斎藤喜博研究の現在』所収)、2012 年、55-74 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉村 敏之 (YOSHIMURA TOSHIYUKI)
宮城教育大学・教育学研究科・教授
研究者番号：80261642

(2) 研究分担者

本間 明信 (HONMA AKINOBU)
宮城教育大学・教育学研究科・教授
研究者番号：70106748